

Dance notation 子母式舞踊表記法に関する韓国所蔵資料調査	
鄭 恵珍 (ジョン ヘジン)	比較社会文化学専攻
期間	2007年11月11日～2007年11月24日
場所	大韓民国 ソウル
施設	韓国国会図書館、国立中央図書館、統一部北朝鮮資料センター

### 内容報告

今回の海外調査研究の対象は、「子母式舞踊表記法」で、これは北朝鮮が1987年に発表した舞踊表記譜 (Dance Notation) である。舞踊動作や舞踊構図などのすべての形象要素を記号などを用いて表記する方法で、北朝鮮では舞踊動作以外にも体育・芸術体操・集団体操などの他の分野でも記録手段として活用されている。動きの行為や身体部位、タイミングなどを記号で表した舞踊記号システムの一つである「子母式舞踊表記法」は、ハングル (韓国語) の子母配列の原理を舞踊表記に用いたことから「子母式舞踊表記法」と命名されている。

15世紀から現在に至るまでの舞踊譜システムを研究した Ann Hutchison Gust (ロンドン舞踊言語センター) の研究 (Hutchinson, A. 1989) の中でも紹介はされているが、「子母式舞踊表記法」に関しては、Dance Notation として世界に公表された時期と該当国の紹介 (U Chang Sop, 1986) のみで、「子母式舞踊表記法」の創案背景や内容などは記述されていない。また、ロシア・中国などの社会主義国家を中心に紹介され、80年代末と90年代初半にはヨーロッパ圏でも一時期関心を持たれた。アメリカリンカーンセンター芸術図書館も子母式舞踊表記法の保存価値を認定し、北朝鮮政府に資料を要請した状況である。しかし、そのような関心に比べ「子母式舞踊表記法」に関する一般的な文献や資料はほぼなく、Dance Notation としての内容もそれほど知られていない。

北朝鮮舞踊に関する資料のうち特に〈子母式舞踊表記法〉に関する資料は、韓国外では手に入れることが難しく、韓国でも北朝鮮政府から提供された一部の公開資料のみで、研究に関する資料収集にも制限がかけられている。また、北朝鮮の公開資料は、韓国の国家機関が保管・提供する場合が多く、インターネット上の資料申請・閲覧が困難であり、故に関係機関への直

接的な訪問調査が必要であった。そのため、韓国での資料調査を行い、韓国の国家機関を中心とした資料を収集する一方、北朝鮮系研究に関連し韓国担当機関との面接調査などを通じ、より具体的な研究の方向性を決めることを本海外研究調査の目的とした。

具体的な調査内容としては、韓国政府機関や北朝鮮関連民間団体を対象とする文献資料の調査と〈統一部〉の北朝鮮資料センター所蔵の舞踊表記法に関する資料調査「舞踊表記法観光」(北朝鮮政府が行っている舞踊表記法を紹介するための観光旅行) に必要となる手続きに関する照会 (統一部長官の承認を必要とする「北朝鮮訪問」「北朝鮮住民接触申込書」などに関する照会) と〈国家情報院〉が所蔵・管理している「子母式舞踊表記法-38分・VHS・」、平壤音楽舞踊大学出版の『舞踊表記法』の閲覧などであった。

以下では、これらの資料を踏まえ本海外調査研究の成果として、現時点での「子母式舞踊表記法」に関する考察を (Dance Notation としての構成と政治性との関連を中心に) 述べ、報告に代える。

### 1. 「子母式舞踊表記法」とは。

舞踊表記法とは、舞踊を音楽の楽譜のように表記できる符号体系を開発し制定したもので「子母式舞踊表記法」とは、北朝鮮が1987年に公式的に発表した舞踊表記譜 (Dance Notation) である。金正日現国防委員長が北朝鮮労働党宣伝・扇動部秘書であった当時 (当時34歳)、国家的事業として推進したものであるとして知られている子母式舞踊表記法は、北朝鮮が70年代初半から標準化された舞踊教育と既存舞踊作品の記録のために開発されたものであった。この表記法は、1970年代初期から約15年間、平壤音楽舞踊大学舞踊表記研究室で研究され発表されたとされる。

北朝鮮の芸術分野の学校では必修科目として取り上げているこの表記法は、人間の全ての身体動作を記録

するために、舞踊動作の形態と動きを現わす15個の子音と舞台位置と方向を現わす19個の母音で構成されており、身振りの形象から表記文字を作りそれをハングルの子母配列のように組み合わせて使うように考案されている。また、人体の高さの構造に合わせ考案した3線の‘舞踊譜表’に舞踊文字を用いて記入し、それ以外に舞踊動作の長さ表（音符活用）・形象表・部位表・省略表・変律表・形象標語（例；欽慕の情を込めて遅く、りんごを取る）などを一緒に活用する。これは舞踊作品の伴奏音楽5線の楽譜の下に記入され、音楽の流れと共に舞踊動作・舞台での位置・構図・踊り手の相互関係などが一目瞭然に理解できる。しかし、一つの動作に対する身体の各6部分の細部動作や舞台構図が同時に読める一方、音楽の楽譜も同時に読める必要があるため、この表記法を身につけるには長期間

の訓練が必要である。

その他「子母式舞踊表記法」は、実際に北朝鮮では舞踊総譜の記録手段として活用されており、舞踊表記専用タイプライターなどが開発されている状況であるが、既存作品の保存という側面からは実効を得たものの、舞踊創作における活用と普及という面においては当初の目標と比べ実用性がやや劣ると考えられる。

形態・動き（母音）

형태, 놀림 (<모음>)

구분	번호	문자	이름
형 태	1	ㅅ	편형태
	2	ㅈ	원형태
	3	ㅊ	굽힌형태
	4	ㅊ	더굽힌형태
놀 림	5	e	돌리기
	6	ㄷ	굽이치기
	7	ㅈ	틀리기
	8	ㅈ	흔들기
	9	~	물결치기
	10	L	짚기
	11	Q	돌기
	12	Λ	뛰기
	13	ㅈ	어기기
	14	ㅈ	넘기기
	15	u	들기

位置・方向（子音）

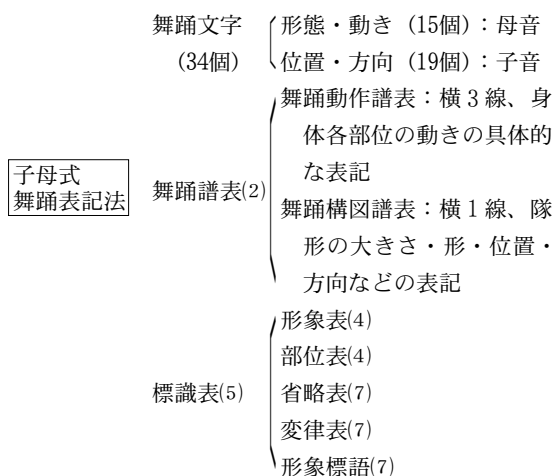
자리, 방향 (<자음>)

구분	번호	문자	이름
자 리	1	0	앞
	2	0	뒤
	3	0	옆
	4	0	우
	5	0	아래
	6	0	비킴
	7	0	엇비킴
	8	ㄷ	오른쪽
	9	ㄷ	왼쪽
	10	ㅈ	울림
	11	ㅈ	내림
	12	+	무대자리
방 향	13	)	안
	14	(	밖
	15	ㅈ	세로
	16	ㅈ	가로
	17	ㅈ	늘혀
	18	ㅈ	무대방향
	19	o	축심

「図1」 舞踊文字の基本符号

『舞踊表記法』1987、平壤音楽舞踊大学舞踊表記研究室、文芸出版社、p4より引用

## 2. 子母式舞踊表記法の構成・表記例



## 2-1 舞踊文字

子母式舞踊表記法では、立体的運動空間で行われるすべての動きを4つの基準形態を推算し、形態文字を制定した<sup>1</sup>。この4つの符号は身体の関節が曲がった程度によって考案されたもので、腕・脚・腰・手首・指など、すべての関節に適用され表記される。また、舞踊の動きとして主に使われている身振りに対して11個の符号と、身体・舞台上での位置と方向を表す12個の符号を制定し、組み合わせて使う。「図1」と「図2」参照。

## 2-2 舞踊譜表

舞踊譜表は、舞踊表記符号を記入するため作られた譜表であり、舞踊動作と舞踊構図を舞踊文字で記録する。舞踊動作譜表と舞踊構図譜表に分類され、舞踊動作譜表には頭部・肩・腕・腰・脚・の身体の動きと舞台上の位置と構図などを記入し、舞踊構図譜表には群舞作品の舞踊構図と登場人物の相互関係を記入する<sup>2</sup>。「図3」「図4」参照。

## 2-3 標識表

標識表は、基本符号以外に言語学での文章符号や音楽の楽譜での演奏表式のように舞踊文字を表記する際、一定な符号（形象標識）を使うことで舞踊動作の性格的特徴を強調する、または舞踊動作を簡略に記録するための補助表記手段である。形象表・部位表・変律表・省略表・形象標語で構成され、小道具の具体的使用法や音楽と登場人物の変化、感情表現などの記入が可能である。

## 2-4 舞踊総譜

舞踊総譜は、舞踊譜表を構成する舞踊動作譜表と舞踊構図譜表をはじめ楽譜も表記する総合表記譜で、独舞・双舞（異性）・2人舞（同性）・群舞などで分け記録することを原則としている。舞踊構図譜表には前舞台・二中舞台・後舞台などで行われる舞踊構図の隊形

형태문자의 제정근거와 생김새




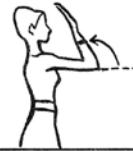
이름 구분 \ 각도	전형태 0도	원형태 45도	굽힌형태 90도	더굽힌형태 135도
형태의 모양				
구별 표시		↙	↘	↗
문자의 모양	し	ㄱ	ㄴ	ㄷ

図2 符号の制定根拠

『舞踊表記法』1987、平壤音楽舞踊大学舞踊表記研究室、文芸出版社、p6より引用

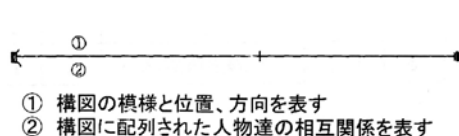


図3 舞踊構図

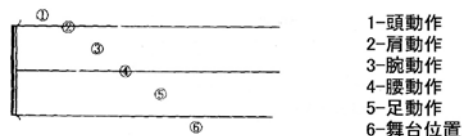


図4 舞踊動作譜表

『舞踊譜読み』、2001、芸術教育出版社、p3より引用



図5 舞踊総譜の表記例（‘Swan Lake’より）

『舞踊表記法』1987、平壤音楽舞踊大学舞踊表記研究室、文芸出版社、p211より引用

とその模様・大きさなどを表記し、舞踊作品の全般的な事項を総合的に読譜することができる。

実際、北朝鮮では〈雪が降る〉〈祖国のつつじ〉〈リング豊年〉〈箕の舞〉等いわゆる4大舞踊名作を含め、舞踊小品や血の海式革命歌劇舞踊<sup>3</sup>、音楽舞踊叙事詩<sup>4</sup>など約100余りの作品の舞踊を舞踊総譜として記録し保存している。

### 3. 舞踊表記の原理

子母式舞踊表記法は、文字の組み合わせの方式のように舞踊においての全ての形象手段を符号化し、譜表に記録できるように体系化したものである。この符号は、3線の上で各自の符号と結合され、舞踊動作を表記するようになるが、その原理を説明すると以下のよ

うである。

#### 3-1 舞踊動作譜表

表記符号を記録するための譜表には、舞踊動作譜表と舞踊構図譜表がある。舞踊動作を成す基本的体位である頭・肩・腕・腰・脚部位の動きと形態は、3線の横線に記入されるが、この三つの横線を‘3線’または‘舞踊動作譜表’と言う。3線はウッソン（上線）・カウンデソン（中線）・アレソン（下線）とし、線と線の間をウッカン（上間）・アレカン（下間）と呼んでいる。その線の太さは同じであることを基本としているが、ウッソン（上線）からアレソン（下線）までの幅は、舞踊の分類によって異なる。

現在、北朝鮮が一般的に使用している3線の規格は

16～30mmの程度であるが、必要によっては30mm以上になる場合もあるとされている。例えば16mmの譜表は、音楽舞踊叙事詩や音楽舞踊物語・舞踊組曲・歌劇舞踊など、大勢の人数が出演する作品を表記する際に使われるもので、ソロや群舞の舞踊を表記する際には20mmの譜表を使う<sup>5</sup>。また、24mmの譜表は舞踊譜読みを、30mmの譜表は練習曲を表記する際、主に使われている。このように線の規格をそれぞれ分けて使用する理由に対しては特に説明されていないが、以上からも分かるように出演者の人数が多いほど、また大劇であるほど3線の譜表が細くなる。これは集体舞踊や群舞が発展している北朝鮮舞踊の特性上、踊り手の個別な動きや相互関係・舞台上の位置などの複雑な表記を圧縮して表記する必要があったからと考えられる。

この三つの線には、舞踊動作を成す身体各部位の動きを符号として記入するようになるが、最初の線の線上から頭・肩・腕・腰・脚の動きを表記する。これらは舞踊作品の音楽譜の下に記入されるため、音楽の小節線と一致させ線を引いて記録する一方、舞踊動作の進行中に拍子または登場人物の変わりがある際には変拍線を、舞踊動作が終わる際には仕上げ線を引いて表記する。

舞踊動作の形態は形態文字と言う符号で表記されるが、この文字は身体部位の関節が曲がった程度によって、0度・45度・90度・135度の四つに区分されている。その他、動き文字と言ってjump・turn・runなど身体部位の動きや舞台上での方向などを符号を用いることにより具体的に表記することが可能である。

### 3-2 舞踊構図譜表

舞踊構図譜表とは舞踊作品での構図や登場人物の相互関係を記録するための譜表で、横一線で表記し、‘舞踊構図譜表’または‘構図線’とも言う<sup>6</sup>。線の上に舞踊構図の形態や位置を表記し、下には踊り手の人数や彼らの相互関係を表記するが、複雑な構図も一つの線に記入するのを原則としている。構図の表記は、構図の隊形を表す符号を中心において、その符号の左側に構図の大きさを表す符号を、右側には構図の方向を表せる符号を表記し、それを組み合わせ一つの符号で記録する。このような舞踊構図は隊形によって直線構図・角構図・曲線構図の3つの基本構図に分けられ、縦線・横線・右斜線・左斜線・曲線などを組み合わせ表記するのを基本としている。舞踊動作や構図が行われる時間的長さを表す‘舞踊長さ表’は、音楽での基本符号とほぼ一致し、舞踊譜表は音楽での五線のように舞踊での符号を記録し舞踊動作や舞踊構図を表す表

記手段の一つとして考えられている。

### 3-3 舞踊譜の形式

舞踊譜には踊り手の人数によって‘独舞譜’‘双舞譜’‘群舞譜’がある。登場人物が一人である‘独舞譜’は舞踊構図と舞踊動作が一致するため、舞踊音楽と舞踊動作譜表のみを記入し、舞踊構図線は舞踊動作譜表の下線に共に表記しなければならない。‘双舞譜’は、二人の踊り手が登場する舞踊譜であるが、北朝鮮においては異性の男女が踊る舞踊場合と同性の二人が踊る場合が区分され、前者は‘双舞’として、後者は‘二人舞’としての形式を意味する。この二つの舞譜は二人の踊り手の相互関係または対称関係を明らかにした上、別々の舞踊構図と舞踊動作譜表を表記することが可能である。最後に‘群舞譜’は男性群舞・女性群舞・混性群舞など多数の踊り手が登場する舞踊を表記する舞踊譜で、舞踊音楽・舞踊構図・各踊り手の舞踊動作譜表を上下に一致させ、譜表の始め部分の一つの線にくくり表記する。子母式舞踊表記法において感情的表現や形象標語は舞踊総譜の先頭に記録されるが、符号化せず言葉で表記される。

### 4. 子母式舞踊表記法をめぐる政治的背景

芸術を宣伝目的として利用し、芸術と芸術家を厳格に統制するのは、北朝鮮のみならず20世紀全体主義国家でも見つけることができる。国家が望む芸術が如何なるものであるのかを初めて規定した国は旧ソ連で、北朝鮮は中国と共に旧ソ連の芸術的性向に大きく影響を受けた。その例が、社会主義リアルリズムを基とした国家のための芸術で、これらは大部分、規模が壮大であり、劇的で、特定のメッセージを盛りこんでいるのが特徴である<sup>7</sup>。

これはナチスドイツと毛沢東時代の中国の芸術思想と非常に似ており、これが北朝鮮にも移植され、北朝鮮では60年代まで旧ソ連の影響を受けた社会主義的リアルリズム芸術が主流をなした。

しかし1970年代に入り、北朝鮮は旧ソ連とは異なる独自の芸術を追い求めるようになるが、その背景には‘主体思想’という政治的思想がある。ここでの主体思想とは、(故)金日成主席が主唱した新たな思想で、金日成はこれに対して“すべてのものを北朝鮮の実情に相応し修正するもので、マルクスレーニン主義の一般原理と他の国の経験を北朝鮮の実情に相応し、創造的に適用して行くことを意味するのが主体思想だ”と定義している<sup>8</sup>。この思想が1970年代、北朝鮮を統治する政治思想として位置づけられるようになり誕生し

たのが主体芸術で、1970年代から北朝鮮芸術の芸術思想として定着した。北朝鮮においての舞踊表記法の開発はこの時代の北朝鮮の政治的路線が反映されたもので、民族舞踊の現代化作業とその脈略を共にする。北朝鮮は1970年代に入り、文学芸術分野で「内容と形式」「創造体系と方法」という側面を改革し、‘芸術創造事業での一大革命’とも呼ばれる全盛期を迎えるようになる。この時期は、金正日が‘労働党宣伝・扇動部’で芸術を担当した時期であり、北朝鮮で‘主体思想’が一つの思想として位置づけた時期でもある。芸術においての‘主体思想’とは、「民族的形式に社会主義的内容を表現する芸術創造方法論」で、この理論が台頭してから演劇と映画、音楽と舞踊などすべての芸術分野では‘主体思想’‘主体理論’に基づいた新たな創作転換が要求された。

舞踊表記法に関して言及されたのもこの時期であり、1970年代から強調された‘主体思想’により再構築された舞踊作品を科学的に記録し、普及させるために舞踊表記法の研究・開発が進行されたとみなされる。

筆者は、修士論文「金剛山歌劇団の民族舞踊伝承に関する研究」において、在日朝鮮人の民族芸術団体である金剛山歌劇団が、総連（在日本朝鮮人総連合会）の結成と共に1955年に創立され、在日朝鮮人の帰国事業のために、北朝鮮から帰国船が日本に入港したことをきっかけに大きく変化し、以来、北朝鮮から様々な朝鮮舞踊を伝授されてきたことを明らかにした。修士論文では、在日朝鮮人の「舞踊伝承」に焦点をあてた研究を行ったが、博士論文では、北朝鮮舞踊の「舞踊理論」の根幹を占める「子母式舞踊表記法」を分析し、「子母式舞踊表記法」による朝鮮舞踊の表記とその記譜法の特徴、そして他の民族の舞踊表記の適用可能性を明らかにすることを目的とし、その例として日本舞踊の演目を用いて検証を行う予定であった。今回の海外調査により韓国において、「子母式舞踊表記法」に関する資料を入手することができた。また、日本においては金剛山歌劇団の舞踊指導員である庚秀奈氏の協力を得て、総連系の朝鮮大学の舞踊教員との面談を通じ、北朝鮮と朝鮮大学で使われている「子母式舞踊表記法」の教材や文献を入手することが出来た。更に、金剛山歌劇団を通じ北朝鮮側に「子母式舞踊表記法」に対する資料を依頼し、平壤音楽舞踊大学の舞踊教員が所蔵していた文献を借りることができた。しかし、韓国・日本・北朝鮮それぞれで入手した資料の内、「子母式舞踊表記法」の内容そのものについて述べてい

るのは、1987年に平壤音楽舞踊大学舞踊表記室が著述し、北朝鮮で出版された『舞踊表記法』のみであった。以前は、他国には知られていない資料が北朝鮮にはあるのではないかと期待していたが、調査を進めるにつれて、北朝鮮にも公式的に発表された『舞踊表記法』以外に正式な文献として出版された本はないということが明らかになった。このような客観的資料不足という決定的な問題を抱えている上に、北朝鮮社会の特性上、現地調査も現実的に不可能であるということが、今回の韓国での海外調査により明確となり、博士論文のテーマの変更が不可避となった。よって、指導教員との相談を通じ、今後は、韓国に伝わる剣舞の内、韓国に伝承された唯一の北朝鮮地域の舞踊である‘平壤剣舞’と、韓国重要無形文化財第12号として指定されている‘晉州剣舞’について比較研究を進める予定である。‘平壤剣舞’は現在の北朝鮮地域である平安南道地域に伝わっている郷土舞踊で、分断以後、韓国でも北朝鮮でも伝承が途絶えたと思われていたが、幼い頃平壤の券番<sup>9</sup>で習ったことがあるイボンエ氏が、復元・伝承し、‘平壤剣舞’名脈を継承している。この剣舞は、子母式舞踊表記法を用いて記録している現在の北朝鮮剣舞とはまた異なる伝統のものである。伝統的‘平壤剣舞’が如何なる形に変化したのかを研究するにあたり、これまでの子母式舞踊表記法の研究を役に立てたいと考えている。

#### 注

1. 『舞踊表記法』、文芸出版社、1987、p6
2. 『舞踊表記法』、文芸出版社、1987、pp17~19
3. 70年代の初めに成立した新しい歌劇（オペラ）形式を示す。革命歌劇と言うのは、金日成が1930年代に直接創作したという演劇を70年代の初めから金正日の指導により歌劇として脚色された作品で、最初の革命歌劇である‘血の海’は金日成が36年8月、満洲満腔部落で作ったという‘血海’が原題である。‘血海’を革命歌劇‘血の海’として脚色する過程で、以前の歌劇と相異なる形式を取り入れることから‘血の海式革命歌劇’と言う言葉が生じた。以後革命歌劇創作において‘血の海式革命歌劇’はモデル化された。主体文芸理論（北朝鮮での芸術創作理論）による‘血の海式革命歌劇’はオペラよりはミュージカルに近く、血の海式革命歌劇においての舞踊は、主人公の思想変化過程を表現し劇の進行を助ける手段として必要な要素として扱われている。
4. 音楽と舞踊を基本形象手段とし、実際にあった社会的・歴史的事件を叙事詩的に描く大規模の舞台総合芸術形式。またはそのような作品。
5. チョンヨンソン、『北朝鮮の文学と芸術』、亦楽、2004、pp241~242

6. チョンヨンソン、『北朝鮮の文学と芸術』、亦楽、2004、p242
7. Jane Portal、『Art Under Control In North Korea』、Reaktion Books Ltd、2005、p43
8. Jane Portal、『Art Under Control In North Korea』、Reaktion Books Ltd、2005、pp112~114
9. 朝鮮の植民地時代芸者たちの妓籍を置いた組合。

検番または券番とも呼ばれたが、朝鮮時代に芸者を総括していた妓生庁の後身とも言える。本来、朝鮮には官妓制度外には公娼制度というのがなかったが、韓日合併以後日本から持ち込まれた徳川時代の遊郭制度を、1916年3月、寺内総督が公娼制度として公布した。その一環で芸者も許可制になり、券番に妓籍を置いて税金を出すようにした。券番は、童妓に歌と踊りを教えて芸者を養成する一方、芸者たちの出入りを指揮し、花代を受けてくれる中間役目を果たした。ソウルには漢城券番・大同券番・漢南券番・朝鮮券番が、平壤には気成券番などがあり、その他には釜山・大邱・咸興・晉州などにもそれぞれ券番があった。券番の必修課目には朝鮮音楽・武道・朝鮮礼法以外に日本語もあった。券番は朝鮮の解放後、1947年10月14日付けで、法律第7号で公娼制度が廃止されることで撤廃された。

## 参考文献

### [北朝鮮文献]

- 子母式舞踊表記法、文芸出版社、1987  
金正日舞踊芸術論、朝鮮労働党出版社、1992  
主体的舞踊・巧芸芸術の新たな転換、文学芸術総合出版社、1995  
舞踊表記1.2（師範科1.2年）、芸術教育出版社、朝鮮大学翻刻、1990

### [韓国学会誌及び文献]

- ソン キスク、北朝鮮子母式舞踊表記法の創案背景と実体研究、舞踊芸術学研究第9号、2002  
チョンレイクン、朝鮮の子母結合式舞踊表記法―世界的な巨大な発見、韓国舞踊記録学会誌第2号、2002  
パク ヨンラン、子母式舞踊表記法、韓国舞踊記録学会誌第2号、2002  
チョンヨンソン、北朝鮮の文学と芸術、亦楽、2004  
[その他]  
Jane Portal、Art Under Control In North Korea、Reaktion Books Ltd.、london、2005  
Ann Hutchison Gust、CHOREO-GRAPHICS、cordon and breach science publishers S・A、1989

じょん へじん／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻 博士後期課程1年生

## 【指導教員のコメント】

鄭惠珍さんは、本学の修士論文で、日本におけるエスニックグループのひとつである在日朝鮮人の舞踊を対象に、崔承喜（チェスンヒ、日本名、さいしょうき）の「朝鮮舞踊基本」が在日朝鮮人の間でどのように伝承され、また変容してきているかについて、金剛山歌劇団、朝鮮学校、在日舞踊家への聞き取り調査を元に明らかにした。博士論文においては、その舞踊内容に深く踏み込んだ考察を行うために、「子母式舞踊表記法」という北朝鮮の舞踊記譜法の記譜体系の解明と分析を行うことを目的のひとつとしている。

北朝鮮の舞踊表記法については一般に公開されている文献資料はほとんどなく、また北朝鮮の社会的特性により、研究に関する資料収集にも制限がかけられているそうである。今回の調査の目的は、韓国の国家機関が保管・提供する北朝鮮の公開資料の閲覧と、韓国人である鄭さん自身の北朝鮮での調査可能性に関する情報収集であった。スポーツや芸術に国境はないというようなことがよく言われるが、芸術分野の研究とはいえ、現実にはインフォルマントのプライバシーに配慮するために、論文へ十分な記述ができないなどの制限があることがこの研究の難しさであろう。結果的には、北朝鮮での調査は不可能であろうことが明らかになったが、韓国において北朝鮮の古い舞踊の伝承者の存在を確認するなど、今後の研究の方向性を見極める上で重要な調査となったようである。朝鮮語の教本（文献）に関しては、方言や韓国の舞踊学では使われていない専門用語が多く含まれるため、今後、在日舞踊家等への聞き取り調査を行い丁寧に解説していくことが必要になると思われる。

（人間文化創成科学研究科 准教授 中村 美奈子）